



【めざす児童像】

☹: 思いやりのある子

☺: さわやか元気な子

☑: ばっちり学ぶ子

## 折れない子ども、たくましい子どもを育てよう！

校長 高田 修司



人生で、自分の思いどおりなること（満足体験）とならないこと（不満足体験）は、一体どちらが多いと思いますか。

私は「思いどおりにならないことの方が実は多い」と感じています。（皆さんはいかがですか？）

しかし、この「思いどおりにならない」という不満足体験への対処方法を、現代の子どもたちは身に付けていると言えるでしょうか？

昨今の教育場面では、転ばぬ先の杖というか、あらかじめ十分すぎる材料やヒントを目の前にならべ、わずかの危険もすべて排除して「超」安全に取り組ませ、予定どおり？成功する…という「満足体験」が多いような気がします。

教え方も、昔の頑固親父（？）のような、声高で頭ごなしという詰め込み型で一方的な指導から、丁寧な理由説明と自ら取り組ませるといった優しい指導が主流になってきました。

成功体験を重ねることで、子どもたちのやる気や自己肯定感も高まるので、大変良い流れであることはいまでもありません。

ただ時々、「これでいいのだろうか？」「甘やかし過ぎてないだろうか？」「社会でやっていけるだろうか…」という不安を感じる場合があります。

つまり、大人がいつも「配慮」をし過ぎていると、「環境が整っていることが普通（当然？）」

（→整っていなかったら誰かを非難する？）

「人が自分のために骨を折ってくれることはあたりまえ」

（→骨を折ってくれない人には文句を言う？）

という子どもを、心ならずも育ててしまっていないか、と心配になるからです。

弱肉強食ともいえる格差社会はひどくなる一方ですが、満足体験いっぱい育てられた子どもたちが社会に出て行ったらどうなるのでしょうか。

何もしてくれない不親切な世の中に不満を感じて逆ギレするか、世の中ってなんて冷たいんだ（誰も自分にかまってくれない）、という思いが募ってポッキリと折れてしまうか、はたまた、歪んだ自己肯定感（自信過剰？）から、身の丈に合わない夢をいつまでも追いつけて、ニート？になってしまいそうです。

「不満足体験をさせている」と称した「放任」は許されませんが、折れない子ども、たくましい子どもを育てるには、適度な負荷やちょっと転ぶという「不満足体験」がそれなりに必要なのかもしれません。

そして、逆境や不満足体験のあとにこそ、手厚い「大人の出番」があるべきです。

